

昭和62年5月8日～5月30日
大学図書館2階展示ホール

下田歌子資料展

今回は、和歌短冊をはじめ、元旦試筆、家族宛の書簡などのほか、香雪叢書第一巻所収の「楓のもとを離れて」、「伊香保の記」などの随筆紀行。遺品・御下賜品を紹介する。

1 和歌短冊

(1) 幼年期

- 一 名所千鳥 和歌のうらの入江寒けく寄浪に こゑも近づく小夜千とり哉
(せき子 10才 文久三年)(806)
- 二 春旅 かさねても爰に宿らむ草枕 たひ寝のまくに花の香そする
(せき子 11才 元治元年)(2364)
- 三 無風花散 春風は吹ぬものから ひきゝぬとちりみたれたる山さくら哉
(せき子 12才 慶応元年)(2374)
- 四 春従東来 吹こゆる風もなこそこの関のとにかすみ立なり はるや来ぬらん
(せき子 13才 慶応二年)(2404)
- 五 つくは山葉山に月の影消て さきりをくらし武蔵の原
(せき子 12才作15才書 慶応四年)(985)

(2) 青年期

- 一 鶯啼声 立よらむ花のあるしはしらねとも こてふに似たり鶯のこゑ
(2293)
- 二 樹蔭納涼 風かよふ柳のかせのつり床に ゆらるゝゆめもすゝしかりけり
(2308)

三 春夏秋冬 春ははな秋は紅葉にあくかれて ゆきも蛭も(蛭もゆきも)
集めさりけり [朱添削評点](2309)

四 仏都巴里斯 みかきそふ(たてなへし)玉の臺や にしの海の都のうちの
ミヤこなるらん [朱添削評点](2316)

五 宇宙 天地の至れるきハミ行物は つき日のかけと道と也けり
(2318)

(3) 壮老年期

- 一 春草 黒土をもたくる草に新らしき ちからも見えて春はうれしも
(796)
- 二 あゆち濁なミたちこえしあしたづの 声おほそらにひゝき残りぬ
(2027)
- 三 水郷冬月 ちとりなく芦やのうらの夕汐に 寒さもみつる月のかけ哉
(2249)
- 四 瀧辺雲 たきつせの水 upstream までは見せぬこそ 高ねの雲の心なりけれ
(2251)
- 五 難波津と名つけたる筆を よしとのミいはるゝ見れば難波つの
あしかるふしやましらさるらん (2258)

2 元旦試筆 明治四十二年 従三位(源)下田歌子 (2439)
鳥ノ子紙 1枚 35×49.4cm
「たつとしの初日にさはる雲もなし 我か世もかくやのとけかるら
む」

